

ながれ星

●佐々木丸美●



ながれ星

●佐々木丸美●

講談社

ながれ星

著者紹介

昭和二十四年北海道石狩郡当別町に生まれる。現住所／北海道石狩郡当別町西小川通五四。著書／「雪の断章」「忘れな草」「花嫁人形」「崖の館」「水に描かれた館」「夢館」「恋愛今昔物語」「新恋愛今昔物語」「風花の里」

一九八一年十二月二十五日 第一刷発行

著者—佐々木丸美 (ささき・まるみ)

発行者—三木 章

発行所—株式会社講談社



東京都文京区音羽二—二二— 郵便番号 一—二 電話 東京〇三(九四五)一一二— 大代表 堀替 東京八—三九三〇

印刷所—豊国印刷株式会社

製本所—株式会社堅省堂

定価—八九〇円 落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えます。

© MARUMI SASAKI 1981 Printed in Japan

ISBN 4-06-130815-7 (文2)



装幀／味戸ケイコ＋長谷川純子

キャンプは快適だった。

小枝を拾い集めて火を焚き、飯盒を並べてご飯を炊いた。話に聞いてはいたけれど飯盒は電気ガマより精巧で味が良かった。火かげん水かげんなんのその、米と水を混ぜて火にかけるだけで最高のご飯に炊きあがるのだ。味噌汁は近くの草花を採って入れたり、浜辺でとった貝を入れた。夜は大きな鍋に魚や海老や貝を片っぱしから入れて海水煮。朝は散策、昼は水泳、夜は星をながめて。都会を離れた生活は楽しかった。ロマンを口ずさむ詩人になったようだった。

キャンプといっても私たちが勝手に来た。炊事遠足と修学旅行を合わせた楽しい企画を見逃すではない。高校三年の夏休みといえど受験戦争の最終レースにさしかかった頃。ところが私たちの憧れの君は一向に気にしないのだ。

大輔君は農作物に魅了され、寒冷地での稲作と気候についてなどどこかの学者気取りで研究していた。それじゃ大学は農学部志望かというと生化学関係というからややこしい。本人は生命起源に興味があってまず植物のしくみから取り組んだと説明するのだけれど。直満子の恋し方は一途のあまり、大輔君は呆れて笑い出した。或る日、二年生の直満子が三年生の教室の前をうろついて、大輔君とばったり出合うとぼろっと涙をこぼした。彼は初対面の下級生が急病になったと思って話しかけ、

介抱した。ところが病は病でも一年余に渡る片想い。

「医務室で薬のにおいブンブンの中で告白したの。清潔でしょう？　それで彼は仰天して、とにかくこの場は病気にしておいてくれて拜むのよ、私のこと。いいわよ、って答えると、どうもありがとう、後でゆっくり話し合おうね、って言ってくれたの。私は本当に熱が出てしまったわ」

こうして直満子は女生徒の憧れの的を射とめてしまったのだ。これが奇跡でなくて何だろう。時には腹が立つ甘ったれも男の人には可愛いだけらしい。

壮君は古代文明にとり憑かれていた。マヤ、インカなど高山に栄えた文明の意味を知りたい、とこれまたどこかの学者気取り。偉い先生たちが一生かけて調査しているのに壮君に解けるはずがない。ところが、ガールフレンドの弘子だけは熱心に相槌を打つから彼も慰さめられるだろう。彼女たちもきっかけは愉快だった。通学電車に乗り遅れて二人で待っていた。持っていたエジプト文明の雑誌に弘子が目を止めると、「や、君、歴史が好きかい？」と壮君はおしゃべりを開始。なにせ普段は標準的でも、いったん歴史に及ぶと狂気のようにしゃべりまくる人だった。弘子はへきえきしたが三年生に逆うことはできず「はあ」とか「そうですか」と答えて耐えた。

「あの時はファッション誌とまちがえたのよ。だってアクセサリーがきらきら、ドレスがひらひらの写真だったんだもの。男の人がなぜこんな本を見ているのかなと思ったの。そうしたらエジプト王女の衣裳だったわけ。その時はもうどうしようもないほど壮君がのってしまったの。彼は、君が気に入った、女生徒が古代文明に興味をもつのは大いにいい、交際しよう、もっと色々な文明を話し合おう、って。気に入られて悪い気はしないものよ。彼とつき合って社会の成績が上がったし。初めはどうでも良かったけど今は好きになったわ」

あっけらかんの性格にふさわしい。弘子の語り口はいくらものろけても甘くないのだ。直満子が大輔

君の噂をする時は目のまわりが桜色になるのに、弘子の場合は平常そのもの。

「本当に好きなの？」

「好きよ」

「恋になっていないのかしら、まだ」

「恋人よ。手を握り合って、それから」

ストップ、私の方が赤くなって止めた。

「そういう時もそんなつまんない顔でするの？」

「いやらしい。するとか、そんな顔とか」

眉をしかめたので弘子が正常だと胸をなでおろした。

さて私の彼はどうかしら。二人に勝るとも劣らない変人で、実際に「博士」とあだ名されている。天文学にぬきさしならないほどのめりこんでしまった。都会は夜空がよく見えない。よって離島の山へこうして通う。小学生の時にあんまり空ばかりながめているので、父親が小さな双眼鏡を買ってくれた。わずか三・六倍のレンズで、芝居見物用のオペラグラスのようなものだった。それでも遠い星が三倍も近く見えた。「あのときの感動は今も忘れない」と言う。そして夜中に双眼鏡をもって外に出て、近所の人に痴漢とまちがわれた口惜しさも、「無学な大人はしょうがない、すぐそういうことに結びつける。あの腹立たしさは一生忘れない」と言う。何を隠そう。この会話がきっかけで、私と彼は交際するようになったのだ。

「世の天才たちは、かならずそういう哀しい誤解があるのよ。それだけ平民より抜きんでていることだと思うわ」

「僕は哀しくななかった。愚かな大人に腹が立っただけさ。人を中傷するのは己おのれの心の中をさらけ

出すことでしかないのに気がつかないんだから。それにしても平民で表現はいい。下司な奴らに対して正常な者は高貴だからね。ところで天才という形容もいいね」

「同情から出たおせじよ。本物の天才にむかつては言わないものだわ」

克人君にはどこかしら博士や天才の印象がついてまわるのだ。成績がいいわけではないし、利巧な顔をしているわけでもない。本人は「星だよ、生まれ星」と悦に入る。星が神秘な力を与えた人は直感が鋭いとか、明日の天候を当てるとか。ところが彼は全部だめ。一緒にテレビのクイズ番組を観ても当たったことがない。どちらかと言えば鈍感の人なのだ。それだからこそ私は安心して彼とつき合っている。男の人は何かひとつ美点をもって、どこかひとつ他人より劣るのが好き。

彼らが同級生なら私たちも同級生。男対女、上級生対下級生。個人的交際が団体交際になると、そんな区切りで争うこともある。「上級生にたてつくのか」と男性が言えば「女生徒をいじめるのね」と反抗する。このたびのキャンプも争った末の勝利だった。

「神聖な研究なんだぞ。ままごと遊びじゃないんだ」

「私たちはいつになったらゆっくり話し合えるの？ 普段は部活とか勉強とか言って。登校と下校だけ一緒なんじゃないや」

「高校生はそれでいいんだ。恋人同士じゃあるまいし」

「お母さんから注意されているのね。いいわよ。わかったよ」

そして私たちは共謀し、親に三人だけで小旅行と言って出て来た。男女のキャンプを親も学校も許可するはずがない。彼らが青ざめるのは当然だった。追い返そうにも船は十日に一度しか来ない。観光地ではなくて、調査用の自然公園だから、一般人にはあまり知られていない。半年も前から役所に申請して入島許可をもらうのだ。彼らが毎年夏休みにここへキャンプに来るので、今年は私たちもお

正月頃から準備していた。苦勞のかいあって大成功。大自然の中で暮すのはこんなに夢ゆたかとは知らなかった。よく人は都会を離れた星空の美しさに魅かれると言うが、決して気取った表現ではなかった。潮騒を枕に、夜露の草の中で見る星は庄巻だった。今まで生きてきて星空の美しさに気がつかなかったことを恥じた。そして神秘的な自然音。音色涼しい耳鳴りに似て、生まれた瞬間から響いていた子守唄に似て。何もかも魅力的で楽しいキャンプ生活だった。

私たちは可能な限り都会の心と品物を持ち込まないようにしていた。副食は雑草であり釣り魚であった。無ければ白米だけで済ませた。それでもやはりテントや寝袋、トランジスタラジオ等、最低限生活に必要な品物は持ちこんだ。自然の生活と意気こんでも野宿して虫刺され、寝冷えで体をこわしては元も子もないのだから。強いて言うなら食生活と時刻制限だけを取り払ったささやかな冒険だった。都会から自然への小さな逃避もあった。日常生活で小説を読むのがそれであり、美しい音楽に酔うのがそれであるように、人々は潜在的に逃避願望を抱いて生きている。さて、それでは逃避を通り越して一挙に原始生活へ閉じこめられてしまったらどうであろうか。

童話の頁に居た私たちは突然、太古の歴史書の頁に移されてしまったのだ。

異変に気がついたのは克人君だった。

テント附近をたむろしていた昆虫が移動している。言われてみれば食べ残した物に集まっていた蟻も見えなくなった。

「変だわ。みんなに知らせた？」

「しめし合わせてビックニックだろうってさ」

常識家の大輔君の言いそうなこと。実行型の壮君は見たことしか信じないし。生命探究も古代文明も豊かな想像力が欠けたらありきたりになると思うが。私たちは泳いだ後の気だるさで散歩していた。かく言う私も虫の移動にそれほど不安は抱けなかった。なまづ君の地震感知も五十パーセントだと聞いているし、大火の前のネズミ移動も確率は五分だというし。しかし残りの半分を用心に当てるかといえそうではない。人間とはおかしなもの。当たると百パーセント、外れても百パーセント、信じるのと嘲笑と極端なのだ。資料として採り入れていくのが一般人の知力だと思うけれど。

克人君が何を直感していたのか私はまだ知らなかった。彼は朝になって大輔君と壮君を連れて海へ行った。

「朝ご飯のしたくしようか」

「うん」

「彼たち何か相談しているみたいね」

「魚や貝のことじゃないかしら。昨日の貝だって深くもぐってやっと採ったのよ。海の幸が人間嫌いで浜からなくなっちゃったんだわ。直満子を起こしてよ」

「手伝ったらかえって仕事がふえるわ」

「水汲みくらい出来るわよ。甘えさせないわよ私は」

大は小を兼ねる。原則にのっとり家から一番大きな鍋を持ち出した。小さな鍋でこせこせ煮るより、たっぷり気分で煮炊きするのは時間的精神的にゆとりができた。食器然り。井と大皿とアルミカップ。ご飯は給仕しなくてもいいし、大皿はおかずが何品あってもオードブル風。カップは碗とお茶併用。洗うのも並べるのも簡単。

「お母さん今頃この鍋を探しているわ」

「桐子のお母さんはきちんとした性格だから毎日トコトン探し続けるわね。うちの母さんは井が無くなってアラ割ったんだっただかしら、と首をかしげて終りだけど」

直満子起きてきた。しっかりエプロンをかけて。

「すぐおしゃれするんだから。大輔君はいないわよ、お気の毒さま」

「弘子みたいな女性は結婚したらとたんに身なりにかまわなくなつて嫌われるのよ。壮君がかわいそう」

朝の散歩、とバケツを持たされて洗顔用具を抱いて滝へ行った。

「彼女のお母さんはすぐわかるのよね、バケツを持ち出した犯人が。今頃お父さんと首をひねつているにちがいないわ。旅行になぜバケツが必要だったのか」

「そして思い立って私と弘子の家に電話をかける。弘ちゃんとは本当に旅行ですか？ バケツはありますか？ 今頃まっ青になつて三家が集合して対策本部を設置しているわ」

「いいじゃない。あわてたつてこの島は十日に一回しか連絡が無いんだもの」

米を計つて野菜を洗つて。硬めか軟らかめかは、その日の責任者好み。今日は弘子だから味つけは辛く、焦げめがつくほどじっくり煮る。つまり壮君の好み。

「結婚したらこうなるのかな」

「お嫁さんの味になるつて父さんが言つてたけど。うちのお父さんがうす口好みで、お母さんと争つたけど、それじゃご自分でどうぞ、とブイ。それで何も言わないことにしたそうよ。で、私に言うの。できることなら同じ好みの男に嫁いでくれつて」

「やっぱり恋人と夫では豹変するのね」

子供が人形を一方的に愛するように、恋する人に一方的に尽くして楽しむ。私たちは生活を知らな

い。ままごと遊びの炊事だから彼らに好みを合わせられる。そんなきれいごとではないと思いつつも、こうしたひとときに酔うのが青春であらうか。真夏の空は青く澄み、何もかもが希望の色に染められていく。

近代社会の発展を悪魔の生まれ変わりのように忌み嫌う人がいる。それは結果だけを見るヤジ馬ではあるまいか。文化発展に伴う精神生活の高揚は大切にしたい。今日があるからこそ今日を尺度として昨日を思い、明日への反省となるのだ。人々が危機に直面したとき、あるいは二者択一を迫られたとき、判断の基準は何であらう。急いで逃げるのが得策でもなく、ただうろろと人について行くのがいいのでもない。しかし多数はその群集心理にのまれる。みんながそうするから私もというのが良いこととは言わない、しかし悪いことでもない。何か起こっても諦めやすい不思議さがある。死なばもろともという適当な言葉があるけれど、みんながそう決めたのだからしょうがない、と。生死を賭した問題でさえ人間は自分に責任をもつ考え方ができない。

海は生き物。生命を孕んだ母なる水たまり。人々はいくつになっても母がよせる波しぶきにたわむれて笑う。海は時々変化する。怒り。哀しみ。今の海はどれだろう。静かすぎるのだ。

克人君は浜から動かなくなった。

他のキャンプの人々は変らず遊んでいる。大輔君と壮君は虫や鳥を探しはじめた。どこかに居れば余計な心配をしなくていいから。まもなく蟻の群を発見。ところが移動中だった。

「丘へ登っていくぞ」

「砂嵐でも起こるのかな」

端正な大輔君の顔と弁慶イメージの壮君の顔が同じになった。人間は戸惑うとき男女を問わず万人

共通の表情になると聞いた。二人がさらに同じ目で克人君をながめたのは愉快だった。博士の言う通りだ、と言いたげに。直満子は TENT へもぐって荷物をごそごそ。お守りの小さな手鏡をボロシャツの胸ポケットへ入れた。色白で愛嬌ある顔がこういうしぐさの時はさらに愛らしい。本人もそれを感じている。大輔君の前でやるから弘子が「カマトト」と眼をむく。

「負けないで弘子も媚びたらいいわ」
「桐子はどう？」

「大輔君のようにナイーブに乙女心をわかってくれるなら。野暮博士じゃちょっとねえ」
「私だって。弁慶にシナをつくったってはいまらないわよ」

中肉中背、白くなく黒くなく。可愛くなく憎らしくなく。平凡な顔立ちと強情まじりのトボケ気質は気が合った。弘子の分析によれば、直満子が甘ちゃんだからいやと言うのは、私よりチャームだらいやという気持ちも含まれているらしい。「あれがもし才女だったら妬きもち焼いて仲間はずれよ。どうしようもない我ままだから仲良しでいられるんだわ」と言ったことがあった。頷けないこともない。女にとって欠点は人の輪につらなる武器かしら。私は鍋の蓋に映った自分の顔をながめた。この程度の造りだから弘子は気を許しているのかしら。よくわからないわ、女の気持ちは。

はるかな沖には行く船もなく、天海を敷く線は揺らめきながら、鷗が飛ばない海は淋しかった。貝も蟹も砂にもぐったきり。これから何が起こるのか、彼らは姿を消すことで私たちに語る。ならうべきか。ながめる海は大きく、遊ぶ人間は小さく。大小はいつも美しいシンメトリーだった。今は不気味な絵。

気がついた人がいる。トレーニングシャツにタオルを首にかけていた。二十五、六歳の男性だった。沖をながめて首を振り、克人君のそばへ行って腰をおろした。大輔君と壮君が急ぎ話に参加した。

「桐子、弘子、ちょっと」

直満子が水汲みから戻って変な顔をした。

「水が増えているのよ。今朝まで足をかけていた石がないと思ったたら川の中なの」

昨日はいつもとより水位は低かった。雨が降らないからだと思つた。今日は雨も降らないのに上がつてきた。水位の変調は地震の前ぶれ。それとも津波か。克人君たちの相談結果を待つうちに、私たちも気持ちの準備はしておいた方がいい。

なだらかな丘を見あげれば真夏の太陽。緑深い山の呼吸が伝わってくる。梢に遊ぶ野鳥の影に安堵した。変わりのない夏の風景。いったい何をあたふたするのか。私たちはただ自然界の休息をかいま見たのだ。海が疲れて目を閉じることもある。眠れば波も静かに、生物たちも母の眠りのために静かに。それでは私たちも心に静寂を住ませようか。楽しいキャンプだもの、不穏な妄想にかき回されてはならない。ならないが——蟻たちは黙々と丘へ行く。皆より遅れをとったと言わんばかりに一生懸命に。やはりこれは避難の光景か。そうだとしたら人間だけがのうのうとしていいはずはない。午後。

キャンプを丘へ移転することに決まった。

「用心のためだよ。何でもないさ。水位が元に戻ったらまた降りてくるんだ。砂より草の方が寝ごこちもいいし」

大輔君は短かく言つた。説明したくても何事も起きてないのだからしかたがないけれど。

「みんなが移るの？」

「わからない。一応は他のキャンプにも声をかけるけど、迷惑がられるのがおちだ」

あちこちのテントから夕飯の炊事の煙がのぼる。さっきの男の人と克人君が大使となって話してい

た。遠目にも人々は笑って聞き流し、二人も笑って次のテントへと。

「こういう場合の親切は勇気が要る。嘲笑されると、つい起こらなければいいはずの災害を起さなければいいと願ってしまうものだ。かと言って自分たちだけで避難して何か起きたら非道とのしられるんだからな。古代の占師が言葉遊びに隠して予言集を遺した心中を察するよ。本当におっかないのは天災よりも人間の心さ」

「用心深く謙虚に生きていりゃ、自然はそんなに意地悪をしないもんだ。その証拠に天災は人間が真摯なうちは襲わない。忘れて浮かれているとドーンとやってくる。やっぱり自然界のは、ちゃんと目と耳をもって人間を見張っているんだよ。祖父が子守唄のように聞かせてくれたっけ。地震や飢饉が来る時の前ぶれを。初めに動物や鳥や植物に変化があつて、それに気がついて防ぐための努力をする者と信じない者との差を。努力して災害が起これなくても決してなあんだと思つてはならない。起きなければより大自然へ無事を感じ謝するべきなのだ、と。昔の人は偉いよ。自然災害の前には人間の面目などかなぐり捨てよ、と根本をおさえている。そうありたいね我々も」

大輔君も壮君も根本は自然礼賛だから、兆しが認められたら克人君と同じ行動になるのかしら。

陽は傾き、夕風の涼にひたる頃、私たちは海を見おろす丘におち着いた。荷を置いて、そのまま草に寝ころんだ。何事も無い夕焼け空、青い海。骨折り損のくたびれ儲けだったとしても、これで安全と思うならキャンプの楽しさは続行される。どんな場合でも用心を重ねて暮すのが結果的に人生は合理的なのだ。

トランジスタラジオの音楽が快かった。リスが足元を飛びはねて行つた。遠くの木に登ってこつちを見ている。音楽を聴いているしぐさだった。音量を上げると、はしゃぐように枝から枝へと走り

回った。気がついて見わたせば野鳥も昆虫も樹木に潜んでいる。鳴き声はなくても気配が感じられた。ここはやはり安全地帯。かれらが海辺から避難して、あるいは遊びにおりて行かない様子に気がひきしめられた。これは確かに異変の前兆だった。

黄昏^{なが}になっても引越してくるテントはなかった。私たちの他に十以上のグループがいるのの一つとして耳を貸さなかった。さっきの男性のテントでさえも。

「一人が言い張ったって他の連中が首を振ったらそれまでさ。僕だって大輔や壮が笑って聞き流しているうちはどうしようもなかった」

「どういう人なの？」

「さあ」

おしゃべりしていたら金具を落とした。引張っていたテントの一枚がゆるんで叱られた。夕食もおあずけでテント張り工事。とにかく囲いをして蚊取り線香を焚かなければ眠られない。小川の上流は細い滝だった。一番のりの儲けで、ここを我が家の台所と決めた。近くの草を刈ってキャンプ場。手元が暗くなる頃に私たちのテントに来訪者があった。昼間のトレーニング姿の青年だった。

「ここからではまだわからないだろうが、海水が変化した。干潮時間ではない。もう下へ来てはならない」

言葉のわりに落ちついている。潮位の異常なら荷をまとめて来ればいい。変な人だ。私たちの学校や名前を聞くくせに自分は名のらない。

「社会としての個になると自由が半分削られる。君たちのように自由に行動できないのだ。今、こうして島の生物の変調に気がついて、耳を傾けてもらえなければ沈黙するしかない。人が聞かなけれ